

【史料紹介】

## 立命館の基礎知識

立命館 史資料センター

学校法人立命館には、創始創立以来確立してきた私学としてのアイデンティティがある。

本稿では、私学立命館のアイデンティティにあたる基礎的な事項を、「立命館 史資料センターホームページ」の記事および既刊の書誌より抜粋編集して掲載した。

学園理解の一助となれば幸いである。

本稿末には、注とともに典拠とした資料の一覧を記してあるので適宜ご参照いただきたい。

### 第一章 西園寺公望と中川小十郎の関係

立命館の学祖は西園寺公望、創立者は中川小十郎である。

西園寺公望と中川小十郎の縁は、西園寺が山陰道鎮撫総督として山陰諸藩を恭順させる行程に、中川小十郎の親・叔父が「弓箭組」として従軍したことから始まった。

後年、小十郎が文部官僚となって以降、公望と小十郎の関係は深くなり、「立命館」の名称継承にいたる。

## 第一節 西園寺公望

第一二・一四代内閣総理大臣、「最後の元老」として著名な西園寺公望は、一八四九（嘉永二年、権中納言（のち権大納言・右大臣）徳大寺公純きんいとの次男として生まれた。二歳の時に西園寺師季もろすえの養子となり、西園寺を名乗ることになった。

幼少期から秀才で「紙魚」と自称するほどに読書に熱中し、自ら漢詩文をこころみるほど漢籍の愛好は終生続いたが、国文や和歌への関心はほとんどなかったという。

公望は若く血気さかんであり、幕末当時の公家の古色蒼然、先例に固執して進取の気風がない姿を憂いていた。

一八六四（元治元）年「禁門の変」が勃発すると西園寺邸門前も戦場となり、一五歳の公望は隣邸の土塀を蹴破って孝明天皇を守りに走った。

これを転機に公望は時勢の推移に注目し始め政治的な問題意識をもって漢籍を読むようになったという。一八六七（慶応三）年二月九日「王政復古の大号令」の後、公望は参与に任ぜられる。これが表舞台に出るきっかけとなった。一八歳であった。

鳥羽・伏見の戦いが起こると、その形勢を窺っていた別の参与が、旧幕軍と薩長軍の戦いを「私闘」と扱い朝廷のために憂いをのこさぬ方が良いとの意見を出した。



18歳頃。若侍姿の西園寺公望

参与であった公望はこの意見に対し「此戦を私闘とするが如きことがあらば、天下の大事去る」という主旨の意見をし、岩倉具視がその見識の高さを賞賛したという。

この時、岩倉は、万一旧幕府軍が京都まで攻め上つてくる場合を考え、天皇を亀岡經由で山陰道を通り長州まで逃がす算段をしていた。この逃避行の準備を公望に頼んでいる。公望の有能さを評価した故であった。これが後に西園寺公望が山陰道鎮撫総督となるきっかけだった。

山陰道鎮撫の後、北越戊辰戦争にも従軍し、京都に戻った後、一八六九（明治二）年京都御苑内の私邸に私塾「立命館」を開設する。

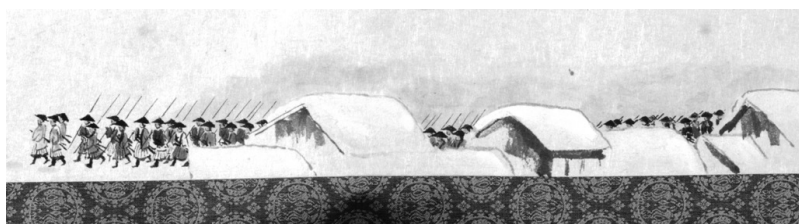
私塾「立命館」は一般的な公家のためだけの家塾ではなく、広く一般人の入塾を認めていた。講師も朱子学者、水戸学の儒者、文章家など様々な分野の著名人を賓師として迎えていた。塾生にはかつて山陰道鎮撫に同行した馬路村の「弓箭組」の者もいた。

ところがこの私塾は、一八七〇（明治三）年四月公望がフランス留学のために長崎遊学に出た後、京都府留守官の命令で閉鎖となってしまう。

公望は旅先の長崎でこれを知ったが、なすすべもなく一八七〇年一二月から一八八〇年八月まで官費によるフランス留学へ旅立つことになる<sup>(1)</sup>。

## 第二節 西園寺と中川一族の出会い（山陰道鎮撫）

一八六八（慶応四）年一月五日、西園寺公望は総督として山陰道鎮撫に出発する。



京を発つ西園寺公望一行  
 (山陰道鎮撫使繪卷 学宝 103 号 学校法人立命館所蔵)



山陰道鎮撫總督西園寺公望丹波亀山へ向かう  
 (1941 年西園寺公を偲ぶ展示会のジオラマ)

京都へ亀岡、福知山経由で宮津に出て松江までの各藩を新政府側に恭順させることが目的であった。行程は懸念された戦も無く、各藩は肅々と恭順し三月二十七日には京都に帰り着いた。

一月五日、薩長藩兵を従えて、最初の逗留地丹波馬路村（現京都府亀岡市馬路町）につく。これを出迎えた人見・中川の両苗の郷士たちは、「弓箭組」を結成して西園寺公望の配下として山陰道鎮撫に従軍する。

この郷士たちの中に、中川小十郎の実父・禄左衛門、養父・武平太、叔父・謙二郎がいた。これが後に中川小十郎と西園寺公望の縁につながるのである（二）。

### 第三節 中川小十郎

立命館の創立者 中川小十郎は、一八六六（慶応二）年一月、丹波国桑田郡馬路村（現京都府亀岡市馬路町）に生まれた。

少年時代は、佐賀県出身の漢学者田上綽俊の下、昼間は小学校で、夜は田上の私塾「致遠館」で学んだ。ここでの授業は厳格な漢学教育で、小十郎は書写や漢詩の作品を残している。田上にその優秀さを認められた小十郎は、一八七七（明治一〇）年、小学校を終えた後田上の転任に付き従って京都の聖護院の塾へ、さらに能登七尾に遊学した。

一八七九（明治一二）年、叔父・中川謙二郎は、小十郎の優秀さを認め東京に出て新しい時代の学問を学ぶよう帝国大学進学を薦め、しぶる両親を説



京都遊学時代の小十郎（10歳頃）と  
恩師田上綽俊

得する。

小十郎は、謙二郎の薦めに強く感化され、学問で身を立てることを志して上京、同年九月には東京の謙二郎宅に寄寓し、東京府第一中学（現東京都立日比谷高等学校）に入学。同級生には後に夏目漱石と名乗る塩原金之助がいた。

一八八一（明治一四）年、帝国大学を目指す小十郎は、第一中学から予備校である成立学舎に通った後、一八八二（明治一五）年東京専門学校（現早稲田大学）を経て一八八四（明治一七）年東京大学予備門（第一高等学校）に入学。

この間に、成立学舎の出身者が中心となって「十人会」を結成したり、女子教育に関する論文を持って文部省懸賞の一等となり、その賞金を出資して山田美妙とともに言文一致運動を進める雑誌『以良都女』を発刊している。

一八八九（明治二二）年には、はれて帝国大学法科大学法律学科に入学した後、政治学科に転籍。在学中の一八九〇（明治二三）年には、R・ボーカールの『實用経済学』を翻訳出版している。

一八九三（明治二六）年、帝国大学を卒業すると文部省に入省。一八九四（明治二七）年、西園寺公望が文部大臣に就任すると、翌年その秘書官となっ



帝国大学卒業記念写真  
後列左：小十郎、前列右：夏目漱石



成立学舎時代の友人と小十郎  
(16歳か) (前列右)

た。

ここで西園寺は、小十郎がかつての山陰道鎮撫に従った馬路の郷士中川の息子であることを知ることになる。<sup>(11)</sup>

#### 第四節 勤労青年教育の重要性を認識してゆく小十郎

一八九三（明治二六）年、文部省の教育行政官となった中川小十郎は、井上毅・西園寺公望両文部大臣のもとで、高等学校の制度設計や京都帝国大学、日本女子大学の創設に関わっていく。

一八九五（明治二八）年、西園寺文部大臣の秘書官になるが、当時満二九歳での抜擢に郷里の中川一族は大変喜んだという。

小十郎は、西園寺の秘書官として日本各地を視察する中で、経済社会を活性化させるために「実業人」育成の必要性を考えるようになっていった。

一八九八（明治三一）年、政局の変動に伴い西園寺が文部大臣を辞職すると、その影響で小十郎も職を失ったが、かつて協力した日本女子大学校創立者成瀬仁蔵の紹介で広岡浅子の加島屋に入社する。

小十郎は加島屋で財政を担当するとともに、実業家として後の大同生命保険株式会社の創業に主導的役割を果たすことになる。

また、加島屋で働く丁稚や手代のために社内には夜学を開設して、「働きながら学ぶ」環境の整備に尽力している。

このころの経験は、小十郎に「若者が働きながら学べる学校」「商法や民法という実業教育を教える」「そうした実学を学んだ若者を沢山輩出することが日本の将来を創る」といった教育観の醸成、学校設立や運営ノウハウの蓄積を促していき、一九〇〇（明治三三）年 私立京都法政学校の創立につながるのである（四）。

## 第二章 「立命館」の由来と創立記念日

立命館の名称は、西園寺公望の私塾「立命館」の名称で『孟子』尽心篇の文章由来する。創立記念日は、五月一九日である。

### 第一節 西園寺公望 私塾「立命館」

一八六九（明治二）年九月、西園寺公望は京都御苑内の自邸に私塾を開設し「立命館」と名づけた。「東京遷都によって低迷する京都の地において、摸索し混乱する大学構想や私塾の不振といった教育状況を前にして、西園寺は公家家塾の枠を越える清新な人材養成の私塾を作ろうとした」<sup>〔五〕</sup> という。

「立命館」は、『孟子』尽心篇にある文章、「孟子曰く、其の心を尽くす者は、其の性を知るなり。其の性を知らば、即ち天を知らん。其の心を存し其の性を養うは、天に事うる所以なり。殀<sup>よっし</sup>寿<sup>じゆ</sup>貳<sup>じ</sup>わず、身を修めて之れを俟<sup>ま</sup>つは、命を立つる所以なり。」<sup>〔六〕</sup> から採られた。



扁額「立命館」（明治2年）学宝24号  
学校法人立命館所蔵



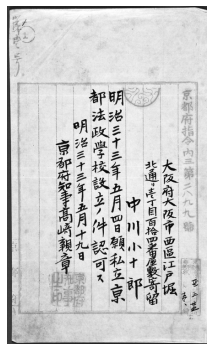
「自分の持っている本心を十分に発展させるような人は、人間の本性が善であることを知るであろう。人間の本性が善であることを知ればそれを与えてくれた天の心を知ることになる。自分の本心を大切に保持し、本性を成長させていくことは天に仕えることともなるのである。短命か長寿かどちらであつても与えられた寿命に心を患わされず、ひたすらに身を修めて静かにそれを待つのが天命を尊重することであり、人間の正しい生き方である」<sup>(七)</sup> というような意味である。

西園寺が志を持って「立命館」を開設した折の扁額「立命館」（明治二年）は、今も学校法人立命館の学宝として保存されており、そのレプリカは総長室に掲出され、揮毫を複製した木扁額は平井嘉一郎記念図書館や立命館中学校・高等学校、朱雀キャンパス一階、立命館小学校に掲出されている。法人がロゴとして使用している「立命館」もこの扁額の揮毫から採られている。

## 第二節 立命館の創立記念日と校名の変遷

中川小十郎は、一九〇〇年五月一九日京都府知事より設置認可を得、鴨川河畔の旧旗亭「清輝楼」を借り受けて「私立京都法政学校」を創立する。この日付をもって、立命館の創立記念日としている。

しかし、創立記念日は当初一定していなかった。創立当時は開校日の六月五日が記念日であった。一九〇四（明治三七）年は京都法政学校設立認可申請日の五月四日、一九一四（大正三）年からは財団法人立命館の設立認可日の二月二日。現在まで続く五月一九日が創立記念日となったのは一九二八（昭和三）年からであつ



私立京都法政学校  
設置認可書

た。

戦後から一九八五（昭和六〇）年までの創立記念日は学年暦上の休日となり、慶事として「立命館」の名が入った紅白饅頭が関係者に配られていた。

「私立京都法政学校」は、その後一九〇三（明治三六）年に専門学校令に基づいて「私立京都法政専門学校」、一九〇四（明治三七）年に「私立京都法政大学」と名前を変えた。

一九一三（大正二）年には、財団法人を設立して「私立立命館大学」、一九一九（大正八）年には「立命館大学」と名を変えた。いずれも「専門学校令」に基づく名称変更であったが、一九二二（大正一一）年、「大学令」に基づく「立命館大学」を設置するに至っている。

### 第三節 財団法人の成立と「立命館」の継承

一九一三（大正二）年、財団法人「立命館」が設立され「私立立命館大学」への名称変更を行った。これに先立ち、創立者中川小十郎は西園寺公望に私塾「立命館」の名称継承を依頼し快諾されている。

西園寺公望は、名称許諾にあたって経緯を記して祝辞とした。その扁額が立命館学園に伝わり学宝とされている。



『立命館 由緒書』学宝 67号  
学校法人立命館所蔵

明治初年余私學を京都に開き名けて立命館と曰ひ學を講じ道を論じ以て國家の進運に裨補せんことを期せり其後故ありて中絶し其名虚しく存すのみ數年前中川小十郎君京都法政大學を創むるに當り余に其扁額に題せんことを求む余仍りて立命館の三字を書して之を與へ且附するに數言を以てし君の力に依りて其實の舉がるを喜び之の力に依りて其實の擧げらるるを喜ぶの意を表せり中川君は明治維新余山陰道鎮撫の命を拜し丹波に下向したる際余の旗下に馳せ參じたる中川禄左衛門君の實子なり然るに扁額は不幸祝融の災に罹りて滅せりと雖も校運は益隆盛に向ひ次で中學を附設し稍其體を成せり今次其組織を改め財團法人となすに及びて余か前に書せし所の題字を採りて其名稱と為せり余は是に於てか益其名實俱に永く存するを喜ぶ思ふに今日の學は開物所成務を以て要と為すも雖も修身立命の工夫亦開却すべからず必ず忠信の行ありて實用の才始めて其功を成すことを得自今斯校に遊ぶ者深く思を此に致さば其運はざるに庶幾からん法人立命館の成立に際し聊か其名稱の由来を叙して祝辭と為す

大正二年十二月十三日  
正二位勲一等侯爵西園寺公望  
立命館総長 中川小十郎 (花押)

明治の初めに、私は京都に「立命館」という塾をつくり、學問を学び國家に有為な人を育てようとした。其の後故あつて閉校し、名前が残つていただけだつた。

數年前中川小十郎君が京都法政學校を創る時、「立命館」の名前を扁額にしたいと頼んできた。

私は中川君の志に喜んでこの三字を書き与へ、人材育成の目的を託した。

中川君は、私が明治維新の時に山陰道を守るために丹波に向かつた折、私の部隊に加つた中川禄左衛門の息子である。

最初書いた扁額は火災で消失してしまつたけれども、學校はその後発展し、中學校を附設し、今回財團法人に改組することになつた。

その際、以前私が書き与えた「立命館」を財團法人の名前にすることに大變うれしく思つている。

今日の學問の姿は当時と違つたかもしれないが、學問は知識を得るだけでなく、人間性を高めたためだけに尽くし何事にも全力で取り組むことによつて実を結ぶものであるという考え方は今日の學校でも忘れてはならないと思う。

このことを財團法人立命館の成立にあつた名前由来とし、祝辭としたい。

大正二年十二月十三日  
正二位勲一等侯爵西園寺公望  
立命館総長 中川小十郎 (花押)

この由緒書の中で語られている「立命館」の扁額は、一九〇〇年の「私立京都法政学校」創立時、学校名は異なるが教育理念は私塾立命館を引き継ぐことを希望した中川に対して、一九〇五(明治三八)年に西園寺公望より寄贈されたものだ。

その後、一九一三年財団法人立命館の設置を期して、法人名も大学名も「立命館」を継承することとなった。

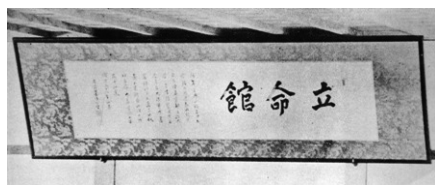
そこで改めて一九一八(大正七)年、西園寺から「立命館」の扁額を寄贈されている。現在も学宝として保存されているが、レプリカ(木扁額)が一つ作成されただけで、学園内への掲出はされていない。

### 第三章 建学の精神「自由と清新」と教学理念「平和と民主主義」

私学立命館のアイデンティティである建学の精神「自由と清新」、教学理念「平和と民主主義」は、歴史の経緯の中で定まった。

#### 第一節 建学の精神「自由と清新」誕生

この言葉は、立命館創立の志である。しかし、立命館創始者の西園寺公望も、創立者の中川小十郎も、こ



1905年の扁額「立命館」  
1908年広小路校舎の火災により焼失



扁額「立命館」(大正7年)学宝26号  
学校法人立命館所蔵

の言葉を使つてはいない。西園寺の生き方や西園寺に師事した中川の教育にかける思いはまさに「自由と清新」だったが、この言葉を使ったことはないのである。

初出は、『立命館創立五十年史』（一九五三年三月三十一日発行）の序文「創立五十年史刊行にあたって」の中で末川博総長が記述した言葉の中にある。

この年史発刊以前は、戦後立命館学園の気風を表現する言葉は「自由で民主的」「自由と平和」などの組み合わせであったが、この年史を境に「自由」と「清新」がくみあわされるようになる。

末川博総長は、「創立五十年史刊行にあたって」で、立命館学園の始まりである京都法政学校の設立経過にふれて次のように述べている。

「京都大学の創立は、西園寺公望公が第二次伊藤内閣の文部大臣であった折に企画されたところであつて、当時唯一の官立大学であつた東京帝国大学に対して、政治の中心から離れた京都の地に自由で新鮮な、そして本当に真理を探究し学問を研究する学府としての大学をつくらうという意図に出たものだけといわれている。

この意図に沿うて京都大学では、後年、いかなる権威にも屈しない真に自由でアカデミックな学風が樹立され、学園の自治独立が現実化されるとともに、世にいう京都法学、京都哲学、京都経済学の如き



末川博（1943～45年頃）  
この後1945年に  
立命館大学学長就任

が栄えるに至ったのである。

だから、京都大学の法科大学が出来てそこに新進気鋭の優秀な学者が集まったのを機縁にわが学園が創立されたということは、立命館学園の性格すなわち自由で清新な学府たるべき性格を決定する一つの要因となっていることができるであろう。」（『立命館創立五十年史』二（三頁）（傍線 史資料セクター））

末川博総長は、西園寺が意図した京都帝国大学の学問の気風が、中川が創立した京都法政学校に引き継がれたとし、西園寺と中川のつながりが「自由で清新」な気脈で通ずるとした。

以降、末川博総長は学園の歴史にふれるとき、しばしば「自由」と「清新」を組み合わせて使い、これが「立命館大学」受験者向けパンフレット（一九五五年）、「大学要覧」（大学発行の学園案内冊子）（一九五八年）などで記載され、徐々に認知度を高めていった。

「自由と清新」を建学の精神とすることは、この時期の機関会議（理事会や大学協議会などの学園の意思決定機関）で審議決定された記録はない。末川博総長の言葉から始まり、学園の学生・教職員が一体となって教育や研究に邁進してゆく中で共有され、確信していったのである。

しかしながら、末川博総長が意図した西園寺、中川から続く戦後立命館学園の「自由」「清新」という連続性は、その後強調されなくなった。

改めて「自由と清新」という学園史の連続性が強調されたのは、一九八一年衣笠一拠点の取組みに向けた

七〇年代後半学園創造の全学討議の中だった。当時の天野和夫総長は後日振り返って「戦後の四〇年代、五〇年代に末川先生が学園の歴史を語る際には、必ず学祖西園寺、創立者中川の業績に触れられていたが、それ以降六〇・七〇年代には触れることが弱くなっていたので、自分が総長に就任してからはかなり意識的にそれに触れるようにしてきた。」<sup>(八)</sup>と述べ、全ての学生教職員が、学園の歴史と到達点に確信をもち、衣笠一拠点を始めとする大きな諸改革を進められるようにしたのである。

続く谷岡武雄総長の八〇年代は、学園の国際化を推進し「国際関係学部」(一九八八年開設)設置の取組みの中で、国際派・自由主義者であった学祖・西園寺公望<sup>(九)</sup>とともに「自由と清新」を学園の気風、建学の精神として学園の創始の志として定着させ、現在に至っている。

## 第二節 教学理念「平和と民主主義」の誕生

これもまた、いずれかの機関会議で決定したというものではない。

日本国憲法にもとづく「あたりまえ」の教育理念が、戦後の社会情勢の変化と立命館の真摯な取組み過程で「あたりまえ」のことをあえて確認する必要があると、さらに立命館のあり方と不可分一体となるまでに重要視されるようになって、教学理念「平和と民主主義」として確立していったのである。

これは一九四七年～五〇年代、六〇年代、そして六八年～七〇年それぞれの時代を背景とする立命館の歩みそのものであった。この歩みを辿っていくと、現在の教学理念「平和と民主主義」が確立・定着したのは、一九七〇年の「立命館大学の現状と課題について」(一九七〇年一〇月二四日学内理事会)といえる。

(一) 戦後「あたりまえ」であった「平和と民主主義」(一九四七～一九六二年)

戦後日本の教育機関は、「日本国憲法」と「教育基本法」「学校教育法」にもとづいて設置された。その教育の根本的精神は、基本的人権の尊重の下、二度と戦争を導かない平和教育と国民一人ひとりを主権者とする民主主義教育であった。日本全体の教育機関にとって「平和と民主主義」は、改めて強調する必要のないほどに「あたりまえ」のポリシーだったのである。

当然立命館も「平和と民主主義」は「あたりまえ」であって、大学自治や意思決定機構の有り様をめぐる議論の中でも、「民主化」「自由で民主的な」等の言葉は多用されているが、「平和と民主主義」を教育の理念であるとまで明言することはなかった。『立命館創立五十年史』、「一九六〇年度 全学協議会確認事項(十二月原則)」(一九五七年一月一日全学協議会)、「一九六〇年度 全学協議会確認事項(新十二月原則)」(一九六一年一月一日全学協議会)にもあえて記述は見当たらない(二〇)。

(二) 全体方針文書に現れ始める「平和と民主主義」(一九六三～一九六七年)

一九六〇年代に入って、教学理念あるいは教学方針の基本である「平和と民主主義」という言葉は、学園全体の課題を議論する際に、必ず現れるようになる。

立命館学園は、将来計画は学生教職員全体で討議して決め、決まったら全員一致して推進する「長期計画委員会」方式「全学協議会」方式を特徴としていた。この「立命館民主主義」と通称される制度の要諦は、提



末川博総長(在任  
1948.2～1969.4)



案者と学園の主体である学生教職員との意見の往復にあった。

理事会や「長期計画委員会」の提案は、各クラス、教授会、職員職場で説明・討議され、出された意見が「長期計画委員会」や理事会に集約され、意見にもとづき提案が修正されて再び全学の討議に付されるという往復作業である。

これは大変な時間がかかるが、一旦決定すれば学園全体が主体者となって目標に向かって邁進し、必ず実現するという力強い仕組みであった。

この討議を有効にするためには、理事会や学生教職員が、立命館の基本的な立場や考え方、「誰の何のための立命館であるか」ということについて同じ認識に立つ必要があった。

そのため提案文書には必ず、「自由にして清新」という学園の気風や「平和と民主主義」という教育の基本理念が明示され、主権者たる「国民」「庶民」のための高等教育を目指すことを明示するようになったのである。

一九六三年、学園の初めての長期計画である「学園基本計画要綱」（一九六三年六月一五日大学協議会）には、「本学は戦後一貫して平和と民主主義を基調とする教学方針を堅持し、他の諸大学に見られない伝統と特徴をつくりあげてきた。」（傍線 史資料センター）と、立命館学園の基本的考え方がしっかりと記載された。

この「学園基本計画要綱」の全学討議を経てまとめられた「一九六三年度 全学協議会確認」（一九六四年一月一八日）では、確認文書の最後の項目で、大学の機能充実のための財政的基盤を学生の父母に転嫁することは「憲法に保障された教育の機会均等を阻害し、平和と民主主義の教学内容に否定的な結果を及ぼすも

のである。」と明記され、全学一丸となって国庫負担大幅増額運動を推進することも確認されている。

一九六七年、「立命館大学における大学自治(案)」（総長選挙規程改定案討議資料）（一九六七年一月二四日理事会）では、「立命館においても、平和と民主主義の教学理念を追求しつつ、上のような大学自治の原則を堅持し、その内容をいっそう充実するよう全学的に努力を傾けてきた」（傍線 史資料センター）という記述が見られる。

この文書は、総長選挙規程改定の原案を学生・教職員で検討した際に提起されたもので、立命館学園の教学理念を平和と民主主義であると明言していた。

こうして、「立命館民主主義」は、提案文書の「はじめに」の部分で世界・日本をとりまく情勢と立命館の建学の精神や教学理念を明示した上で、全学で共通の認識に立ち、立命館の社会的使命から見て、どのように情勢を捉え、どのように改革を行っていくかを議論したのである。

### （三）あたりまえの「平和と民主主義」の危機と再確認（一九六八～一九七〇年）

「平和と民主主義」は「あたりまえ」であって、全学での議論において共通の認識として確認するというニュアンスであったものが、改めて教学理念として再確認する必要性が生まれてくる。

一九六八年から日本全国に起こりはじめたいわゆる「大学紛争」<sup>(二二)</sup>は、立命館にも波及し、一九六八年一二月に発生した「学園新聞社事件」<sup>(二三)</sup>を端緒として、これまで全学構成員の総意によって築き上げてきた民主主義的制度を否定し、暴力によって主張を押し通そうとする学生集団が生まれた<sup>(二四)</sup>。

立命館はこの事態に対して、忌避したりおもねる態度をとることなく、正面から立ち向かう道を選択した。その際に改めて強調したのが「平和と民主主義」だったのである。

教育理念「平和と民主主義」とは、これまでの立命館の教育の柱であるとともに、幾多の危機を乗り越えて民主的制度を整備してきた学生教職員の「諸問題は民主的討議をもって解決する」「暴力は絶対に許さない」という学園アイデンティティとしての強調である。

立命館は、「大学紛争」を一部の学生の暴力行為という表層としてではなく、近年の日本を取り巻く情勢、日本の高等教育をとりまく情勢、そして個別立命館大学の戦後から現在（一九六九年）に至るまでの意思決定方法、教学と財政の関係など学園運営のあり方、学生教職員の勉強研究労働条件のあり方など、これまでの立命館の歴史的取組みの総括問題として捉え、大学全体の改革をもってこの危機を乗り越えようとした。

そうして「大学改革のための討議資料」<sup>(二四)</sup>を元に一年以上をかけて理事会、教授会、各クラス、職員の職場、教職員組合、学友会・自治会で討議を行い意見集約していった。

「大学改革のための討議資料」に基づく全学の議論は「立命館大学の改革についての答申」（一拠点、教学、学生規模、管理運営、財政）（一九七〇年九月一九日 長期計画委員会）として改めて全学討議に付された。

この文書の「まえがき」には

「本文書は、学園の展望を確定することが急務となっている現在、基礎資料として今後とも重視されなくてはなりません。『答申』が提起している諸課題に関しては、すでに各学部などの討議のなかから活発

な意見が寄せられつつあり、学内理事会は『啓申』ならびにこれをめぐる教職員の討議をふまえつつ、早晩学園の新たな基本的要綱ないし政策を立案し、大学協議会の決定をまつて、全学に提示することを期しています。」

とあり、討議の前提として全学が共通の認識をもつことの重要性を訴え、これまでの意見の反映と再提案によるさらなる全学討議を呼びかけている。

さらに、本文の最初には「はじめに」として本学の教学がこれまでどのように発展してきたかを共通認識にすべく

「戦後の民主化を背景にして、末川博氏が学長に就任され、本学は憲法と教育基本法に基づく『平和と民主主義』を基本理念とし、研究を重視し、それを基礎とした教育をめざし、学問・思想の自由と大学の自治の確立に努力した。

教職員と学生の努力により『自由にして清新なる学園』と『庶民の大学』として他大学には見られない学園を築き上げてきた。」（傍線 史資料センター）

と再確認し、平和と民主主義がカッコで囲われ、不可分一体であることが強調された。

他方、「大学紛争」は日本社会全体の問題でもあったため「大学改革」の学内議論と平行して、学生の父母、

校友にむけても大学紛争に対する立命館の考え方を発信した。

一九六九年一〇月五日発行の「学園通信」<sup>(二五)</sup>では、立命館大学総長事務取扱(事実上の総長)武藤守一経済学部長<sup>(二六)</sup>が「立命館大学の近況報告―最近の紛争に関する大学の見解―」を掲載している。

少し長いが、この時期の「空気」と立命館の考え方が端的に記されているので引用する。

大学紛争は、全国的な現象であって立命館大学だけのことではなく、根深い問題をも含んでおりますので、われわれとしては当面の対策も重要であるが、同時に根本策についても検討を進めて来ました。これによって、いままでの立命館大学が社会から一定の評価を受けてきた基礎の上に、さらに新しい施策を加えて、今こそ大学改革の先駆的役割を果たしたいと考えております。(中略)

世界のいたる所で思想的・政治的・経済的・軍事的にその他あらゆる面で矛盾や衝突が絶えず生じています。世界はまさに変革期にあるといえます。このような世界の中にある日本でありますから、非常な発展の側面をもちながらも、累積する矛盾の拡大、それが大きな底流となっていることを否定することはできません。(中略)

このような国の内外の動きをまず敏感に感じとり、不安に思い、それを直接に行動に現わしがちであるのが青年であり学生であります。ただ、それを正しく受け止め、正しく行動に移すかどうか、ここに



武藤守一総長  
(在任 1970.2～1970.9)

大きな問題があります。(中略)

矛盾を最も敏感に感じ不安に脅やかされる彼ら自身が、その出身階層に制約されて、意識は観念的に、行動はラジカルに陥り易いという弱点をもっています。(中略)

立命館大学が戦後急速に発展した原因は果たしてどこにあったのでしょうか。平和と民主主義を教学の基本理念としていたこと、民主的体制の確立、經理の公開、低学費、教学の充実などいろいろな挙げ得るでありましょう。いわゆる「立命館方式」といわれるのは、総長選挙への学生参加をはじめ、全学協議会を中心として教職員・学生が一体となり得る全学的な民主的体制があったからであります。このような自他ともに許す民主的立命館にどうして紛争が生じたのでしょうか。(中略)

それは三十五年の安保改定以後、国内の矛盾は拡大し、その反映として、それを受け止める学生の立場と行動に統一性が困難となり、さらに外部からの策動もあつて、統一とは逆に対立と憎しみの度を加えることになりました。このために立命館大学においても、民主的体制をもちながら、民主的運営に重大な支障を来たすこととなり、数年間にわたつて全学協議会を開くことができなくなりました。そのために、学生諸組織の間の摩擦が次第に激化し、昨年十二月中旬には学園新聞社問題をめぐつて、ゲバ棒が公然と現れるに至り、総長選挙規定の改訂もできなくなりました。(中略)

われわれは全共斗を責め、政府を追求し反対するだけでなく、自ら顧みて改革すべきことは大胆に改革するという積極的な姿勢と具体的な方針をもたねばなりません。立命館大学ではすでに、大学の理念から始まつて、教学の内容・条件・体制の全般にわたる改革のための討議資料を全教職員・学生に配布

し、全学的討議の中で、新しい大学のあり方、新しい立命館大学のヴィジョン確立のために、目下努力中であります。

(四) 学園アイデンティティとしての教学理念「平和と民主主義」(一九七〇～一九八〇年)

一九六八年から一九六九年にかけての全学あげての大学改革討議の結果、一九七〇年「平和と民主主義」は立命館の教学理念として再確認された。これを端的に示した文書が「立命館大学の現状と課題について」(一九七〇年一〇月二四日 学内理事会)である。文書からその部分を引用しよう。

二、立命館大学の立場

わが学園の現状と将来を考察するためには、まず立命館大学が何を抛り所にし、何を目ざしてきたか、学園の基本的立場を確かめておく必要があります。(中略)

本学は戦後一貫して『平和と民主主義』の教学理念を標榜してきました。しかしこれは、なにか他の大学と異なる特別の目標を追求しようとしたものではありません。平和と民主主義のための教育・学問という理想は、敗戦後新しい憲法と教育基本法がつくられた時、戦争と軍国主義の惨苦を体験してきた国民が、過去の歴史の深い反省にたつて、これからのわが国教育の根本理念として確認し合ったものです。わが大学が多少ともこの点で特色ある学風をもっているように人々に映るとすれば、それはただ、立命



細野武男総長  
(在任 1970.11～1978.6)

館大学がこの二十年余、そうした国民的理想にもっとも忠実であろうと努力してきた大学の一つであるからに過ぎません。

本文書は、「立命館大学の改革についての答申」(一)拠点、教学、学生規模、管理運営、財政)(一九七〇年九月一九日 長期計画委員会)後の討議のまとめとして学内理事会で決定されたもので「平和と民主主義」を不可分一体のものとし、立命館の教学理念とした長期計画委員会答申を再確認している。

さらに、「平和と民主主義」の教学理念は憲法・教育基本法の理念であって、立命館の特色として写るのは、歴史の中で、どのようなことがあってもこれを忠実に護ろうと努力してきた結果にすぎない。とその原点を明言している。

以後、立命館の対外冊子、全学協確認等には必ず「平和と民主主義」が、立命館の原点として記載されるようになり、とりわけ立命館の教育の有り様(教学)を語るとき必ず「平和と民主主義」が教学理念として記述されるようになったのである。

#### 第四章 「未来を信じ 未来に生きる」とわだつみ像

「未来を信じ 未来に生きる」は、末川名誉総長が「わだつみ像」に託した「不戦の誓い」と教学理念「平和と民主主義」を一言に凝縮した言葉である。



## 第一節 記念碑「未来を信じ 未来に生きる」

立命館大学衣笠キャンパス正門を入ると、バスロータリーの中央に「未来を信じ 未来に生きる」という末川名誉総長の言葉の碑がある。

この碑は一九八一年立命館大学の衣笠キャンパス一拠点が完成した折に建立され、当時の天野和夫総長により由来が次のように記されている（一七）。

本学創立八十周年ならびに衣笠移転完成を記念して、この碑を建てる。

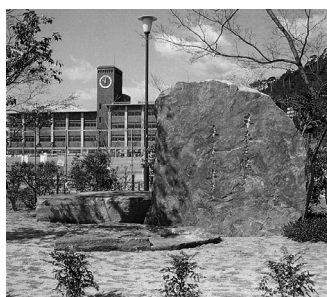
碑の文字は、末川博先生が、本学に建立された「わだつみの像」の台石に刻むため書かれたもの。この言葉には、平和を願い、不戦を誓って、青年の未来を守れという意が、こめられている。

一九八一年五月一九日

立命館総長 天野和夫 記

天野総長が記した「わだつみ像の台石に刻」まれた文とはどのような内容であったか。

また「この言葉（未来を信じ未来に生きる）には、平和を願い、不戦を誓って、青年の未来を守れという意がこめられている」とあるのは、どのような由来であったのか。



建立時の碑（1981年5月19日）



現在の碑

## 第二節 わだつみ像の台石に刻まれた文は

記念碑「未来を信じ 未来に生きる」の由来記にある「わだつみの像」<sup>(二八)</sup>は、日本戦没学生記念会（わだつみ会）の委嘱によって、一九五〇年八月一日、彫刻家・本郷新（一九〇五～一九八〇）が制作した。

当初は、アジア太平洋戦争の戦場に出征し、生きて帰ることのなかった戦没学生たちの嘆き、怒り、黙した苦悩を象徴した記念像として、東京大学構内に設置する予定であったが建立できず、以後本郷新氏のアトリエで眠ったままとなっていた。

一九五一年一月八日、立命館大学で開催された「全立命戦没学生追悼慰霊祭」の席上、末川総長が、この「わだつみ像」を本学に受入れることを表明し、全学挙げて誘致の取組みの結果、立命館大学に建立されることとなったのである。その台石に刻まれていたのが、「未来を信じ 未来に生きる」で始まる文であった。

未来を信じ未来に生きる。そこに青年の生命がある。

その貴い未来と生命を聖戦という美名のもとに奪い去られた青年学徒のなげきと怒りともだせを象徴するのがこの像である。本郷新氏の制作。



「わだつみ像」除幕式  
(1953年12月8日)



広小路学舎に立つ  
「わだつみ像」

なげけるか　いかれるか　はたもだせるか

きけ　はてしなきわだつみのこえ

この戦没学生記念像は広く世にわだつみの像として知られている

一九五三年一月八日（一九）

立命館大学総長　末川　博　しるす

一九五三年一月八日、旧広小路キャンパス研心館前で「わだつみ像」の建立除幕式が行われた際には、全国から平和を願う二、〇〇〇名をこえる学生、市民が集い、末川総長、日本戦没学生記念会（わだつみ会）理事長柳田謙十郎氏、像制作者本郷新氏、像命名者藤谷多喜男氏などが列席している。

その折、学生の代表により「不戦の誓い」が読み上げられた。戦争が終わってまだ八年、惨禍の記憶が強く残る中での誓いの言葉である。

不戦の誓い

わだつみ像よ

かつて私たちの先輩は、

愛する人々から引きさかれ偽りの祖国の光栄の名の下に、或いは南海の孤島に、或いは大陸の荒野に空

しい屍をさらしました。

その悲しみのかたみであるあなたの前に私たちは誓います。

再び銃をとらず、再び戦いの庭に立たぬことを。

わだつみ像よ

かつて私たちの先輩は、

何の憎しみももたぬ他国の青年と偽りのアジア平和の名の下に、愚かな殺し合いの中で尊い血を流しました。

その嘆きのかたみであるあなたの前に私達は誓います。

再び他国の青年と戦わず、共に組んで世界の平和を守りぬくことを。

わだつみ像よ

かつて私たちの先輩は、

魂のふるさつである学園で考える自由も学ぶ権利も奪われ、なつかしい校門から戦場へ送り出されました。その苦しみのかたみであるあなたの前に私たちは誓います。

学問の自由と学園の民主主義の旗を最後まで高く高く掲げることがを。

一九五三年十二月八日

翌一九五四年一月八日には、「わだつみ像」の前で、第一回「不戦のつどい」が行われ、以降毎年一月には像の前で「不戦のつどい」が開催されている(10)。

### 第三節 教学理念「平和と民主主義」の象徴として

この文は、「わだつみ像」が象徴する不戦・平和の誓いだけでなく、立命館大学の教学理念の有り様をも現していた。

冒頭の「未来を信じ未来に生きる。そこに青年の生命がある。」という部分に込められた思いに関わって、末川総長は自伝(末川博著『彼の歩んだ道』岩波新書 一九六五年)で次のように述べている

それにしても、この間で最も痛惜にたえないのは、若い人たちが戦場にかり立てられて帰ってこないことであり、わけても二十一年前のいわゆる学徒出陣でペンを銃ににぎりかえて学業なかばに悲壮な気持ちで戦列に加わった青年学徒が散り去ったことである。これらの学徒が高めようとしていた知性を否定され、みがこうとしていた理性をふみにじられる矛盾を止揚しえないままに、その矛盾のなかで散華したのを思うと、断腸の感なきをえない。(中略)

人間の幸福と世界の平和のために貢献しうる学問のみが真に学問と呼ばれるに値する。そして人造り



2016年度の「不戦のつどい」国際平和ミュージアムわだつみ像の前に立つのは吉田美喜夫前総長

のための教育もまた、このような真の学問の上に立ちながら、愛情と理解と信頼によって行われなければならぬ。

学問は人間の幸福と世界の平和への貢献をその使命とし、未来においてそれをなしうるのは、今学問に打ち込む青年であること、だからこそ教學理念を「平和と民主主義」として戦争を廃し、青年の未来を守らなければならぬのだというのである。

天野総長が記した「この言葉には、平和を願い、不戦を誓って、青年の未来を守れという意がこめられているのは、こうした末川総長の思いがある。

#### 第四節 「わだつみ像」 破壊・再建・再建立

不戦の誓いとともな教学理念「平和と民主主義」の象徴となった「わだつみ像」は、大学紛争さなかの一九六九年五月二〇日、全共闘を名乗る者により破壊された。頭は割られ、腕はもぎ取られ、引き倒された上にペンキで落書きをされている。

立命館では、こうした行為を批判するとともに、わだつみ像再建の取組みを始めた。翌年の一九七〇年二月八日には立命館関係者や全国の人々の寄付により再建されたが、再破壊の危険から元の場所には設置することができなかった。一九七〇年～一九七五年の間、広小路学舎の図書館に保管され、五月二〇日と二月八日の



破壊された「わだつみ像」

「不戦のつどい」の時だけ、二体の「わだつみ像」（破壊されたわだつみ像と再建されたわだつみ像）が人々の前に設置されていた。

一九七五年一月、再建された「わだつみ像」を再度設置（再建立）するために「わだつみ像建立立命館大学実行委員会」が結成され、グッズ販売や募金活動を行い、一九七六年五月二〇日、衣笠中央図書館に再建立されている（二二）。

その後一九九二年立命館大学国際平和ミュージアムの開館とともに、図書館から移設され現在にいたっている。

## 第五章 「総長公選制度」と「全学協議会制度」

「総長公選制度」と「全学協議会制度」は全国の大学でも珍しい制度で、「学内優先の原則」とともに一般に「立命館民主主義」と呼ばれる立命館学園の特徴である。

「総長公選制度」は、立命館学園の教育・研究上の責任者である「総長」を選ぶとき、生徒・学生・教員・職員の意思を反映しようという制度で、末川博が初代総長となった。（四年任期。末川博は五期二〇年総長の職についていた。）

二〇一九年一月就任の仲谷善雄総長は、末川から数えて一〇人目の総長である（二三）。



衣笠中央図書館に再建立された「わだつみ像」



破壊された「わだつみ像」（奥）と再建された「わだつみ像」が並ぶ

また「全学協議会制度」は、立命館学園の将来の姿や運営方針を考える時に、提案された原案を元に、学園を構成する学生や教員・職員が参加して精査していく制度で、四年毎に開催される制度である。

「学内優先の原則」は、教学優先の原則とも呼び、学園が今後の進路を選択する際に、学内（教学Ⅱ教育・研究）を優先に、とりわけ学ぶ主体である学生を最優先に考えるという原則のことを指し、「総長公選制度」と「全学協議会制度」と密接に関連した基本的な考え方である。

さて、この「総長公選制度」「全学協議会制度」は、どのようにして生まれたのか。それは戦後の混乱から抜け出そうとする学園の取組みの事歴があった。

### 第一節 一九四五年、平和と民主主義の立命館再出発と末川博学長・総長の誕生

一九四五年敗戦とともに立命館学園は、それまで国家主義的傾向が強かった学園の運営方向を改め、一九四五年一月末川博を立命館大学学長に迎えて再出発し、寄付行為の改正、経営陣の一新を経て民主化を進める。

一九四八年二月、末川博学長は寄付行為改正に基づき総長となり、同年四月に設置された新制の立命館学園（立命館大学・立命館高等学校・立命館神山高等学校・立命館夜間高等学校）と旧制の立命館専門学校全体の教育・研究の復興を担う象徴的な存在となった。

国中が食糧難や経済的な困窮状態にある中での学園の再出発は、まず全学一致して教育設備の充実に力を入れることが重要であった。



他方、一九四七年六月 教員・学生・父母（父兄母姉）・校友によって「立命館大学拡充後援会」（以下「拡充後援会」と称す）が発足する。これは当時学園の弱点であった施設・設備の貧困さを克服し、一九四八年四月からの新制大学発足に当たって教育施設・設備を充実させようという強い意欲から発足した団体であった。

## 第二節 グラウンドか教室か 対立する教育条件整備と末川総長辞任

この「拡充後援会」が最初に取組もうとしたのが、等持院学舎（現在の衣笠キャンパス）における総合グラウンド建設（後に「立命館衣笠球場」の竣工のみをもって中断）であった。

この提案は、体育館建設と合わせて理事会や校友、一部教員が積極的に推したのだが、多くの学生や教職員は、教室その他教育設備を優先すべきとして提案に反対する。

末川総長も「現在の緊急課題は教授陣の充実と教室等の教学施設の建設にある」（『立命館百年史 通史二』一〇頁）と理事会において主張するが、聞き入れられなかった。

理事会内での対立が深まる中、ついに一九四八年二月二二日、末川総長は学園宛に辞表を提出、翌二三日の学園理事会で辞意が報告される。

一九四九年一月九日の理事・評議員合同会では、末川総長自身が登壇し、辞意の理由として、総長に就任して三年を経て、学園の民主化の一応の見通しがついたこと、自分はまた学問研究に専念したいことを述べ、さらに「教学上の責任者であっても今日のように私学の財政上の危機が叫ばれる時は、財政上の問題につい

でも考えねばならず、これ等について処理する自信がない。」(『立命館百年史 通史二』一八一～一八二頁)と表明した。

制度上、総長に学園経営上の責任はなかったが、学園構成員の期待とともに末川総長自身は強く経営・財政の視点を意識しており、結果としてグラウンドか教室かの問題で板ばさみとなったが故の辞意であった(三三)。

### 第三節 総長辞意に激震 寄付行為改正・総長公選制度の誕生

末川総長辞意の報は、全学を揺るがし、留任・復帰運動が巻き起った。

これに先立つこと一ヶ月前の一九四八年一月二四日、学園理事会は、戦後民主主義の具体化として「総長公選制度」を含む寄付行為改正を審議承認し、一月七日付けで文部省に認可申請していた。そこへ総長辞意の事態が起こり、復帰運動の中で、急速に制度整備が進むことになったのである。

末川辞意表明後の一月二八日、理事評議員合同協議会では、寄付行為の改正が認可され次第、「総長公選制度」の具体化を進め、選挙を実施して末川の復帰を求めることが決定され、一九四九年一月七日の理事会では総長選挙規程起草委員会が発足する。

総長選挙規程起草委員会は、「学生の参加を含めて選挙権は全学園構成員に保障され、全選挙人に占める教職員・学生生徒の数は九五名中八三名で、八七・三パーセントに達し(中略)学生選挙人を制度化し、選出された学生選挙人が直接に候補者に投票するという積極的な」(『立命館百年史 通史二』三二頁)制度を提案

する。この「選挙人の大多数が学園内構成員であること」「学生自らが総長選挙の選挙人となること」は、他大学に類を見ないいわゆる『立命館民主主義』の先見性を示すものとして特徴付けられることとなった。

一九四九年一月一日 寄付行為改正が認可されると、二月二七日評議員会で規程を同日付施行し、三月二二日、学園初の総長選挙が実施されることとなったのである（二四）。

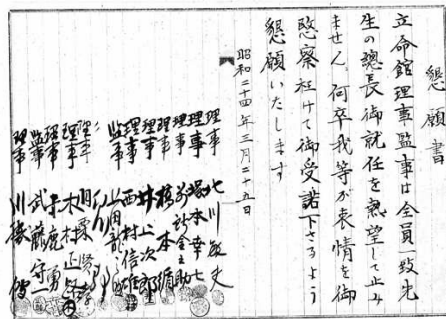
これが「総長公選制度」の始まりである。

選挙の結果、末川は総長として選出されたが、辞意に至る経過を踏まえて、教授会・学友会を含め多くの学内諸団体が、あえて就任の要望を伝えるべく嘆願書を差し入れている。

こうして末川博は、選挙による全学の総意として、改めて立命館総長として選出され、以降一九六九年四月一日に任期を終えるまで、二期二〇年にわたり立命館の総長として学園の復興と振興にあたったのである。



1950年学園創立50周年式典での末川総長  
(1949年3月の総長公選制度による再任1年目の姿)



総長選挙の結果を経て理事監事連名による総長就任の懇願書（一部）  
1949年3月25日

#### 第四節 グラウンド建設計画に端を発する全学協議会の誕生

一九四七年六月発足の「拡充後援会」には、学生自身もメンバーとして加わっていた。これは学園の政策策定に学生が参加する初めての出来事であった。教育研究の条件整備は本来学園の経営責任のだが、当時は関係者全員で検討し決定するという風潮だったのである。

「拡充後援会」の最初の事業は、前述の総合グラウンドと体育館の建設であったが、その計画はどんどん膨大なものとなっていった。前述の通り、末川総長ほか教員学生はグラウンド計画には反対だったが、当時の理事会内では少数派であったため、学園の計画はそのまま進められていた。

計画を担保する財政は、学園規模が小さく校友の社会的広がりも小さい中で、教員・学生・父母・校友の寄付に依存していくことになった。寄付は任意なのだが、学生の分は一人当たり寄付額一二〇円として、学費に加算して強制徴収ということになった。「拡充後援会」のメンバーとして学生が加わっていたため、結果的に学生自らが学費の強制徴収に手を貸すことになってしまったのである。

集まった寄付は、校友からは約五万円、学生の学費からは約一〇〇万円となりほとんどが学生（父母）負担となってしまった。

さらに、拡充事業に絡んで利権・金権の不正・腐敗疑惑がマスコミによって暴露（『京都日日新聞』一九四八年三月一六日・一七日付。後に「京日事件」と呼ばれる）されるにおよんで、学生は理事会を厳しく批判するようになる。

理事会は疑惑に対応するように、「拡充後援会」を改編して財団法人内に「立命館拡充部」を設置（教員・

学生・父母・校友からなる任意組織から経営体内の組織に改編）し諮問機関として「拡充委員会」を置いて学生の参加を求めた。

自ら学ぶ施設・設備を充実するために加入したにも関わらず、本意では無いグラウンド建設計画が推進されてしまったこと。その建設経費を、事実上学費に上乗せする形で、しかも校友の寄付額の何倍もの負担として強いられたこと。さらに、その計画の裏で不正が進められていたこと。不正が発覚すると、組織改編して追及を回避しようとしたこと。

こうした経験は、学生自身にとって学園の機関への参加のありようの苦く辛い反省材料となった。

一九四八年九月、これらのことから学生は「拡充委員会」の参加要請には応じず、経験の反省に立って新たに立ち上げたのが「立命館大学全学協議会（全学協議会）」であった（二五）。

初期の全学協議会は残念ながら、学園が直面する課題を論議する場としては十分機能せず、今日のような学園構成員を網羅する協議機関として運営されるにはまだしばらくの時間が必要だったが、いわゆる「立命館民主主義」を支える重要な機関が、この時誕生したのである。



全学協議会風景

奥：学園執行部（中央末川総長）、  
手前：学生（1958年卒業アルバムより）

## 第六章 立命館の校歌・学園歌

立命館の校歌は、一九三一（昭和六）年七月誕生した。

歌詞は

一、あかき血潮 胸にみちて  
若人眞理わかうじまことの 泉を汲みつ

仰げば比叡 千古のみどり ふう目に清しや 鴨の流れの

かゞみもたふとし 天の明命 見よわが母校 立命

立命

二、見よやみどり とわの映はえは あふぐもかしこき 平安の御所

よき師友などち 和みて此處に 契ひて結べる 『禁衛』 『立命』

躍進日本の 輝きおへる みよわが母校 立命

立命

（『立命館学誌』第一四五号）

である。

この二番は、戦後時代にそぐわないとして一九四八年一〇月四日の理事会で改廃が提起され歌われなくな

り、一九九〇年五月二五日理事会で正式に廃止された。

また、学園所在地が京都だけではなくなったことから、現在は立命館大学においては「校歌」、APUや附属校では「学園歌」としてうたわれている。

## 第一節 校歌誕生

『立命館学誌』の一九三一（昭和六）年九月号（一四五号）に「立命館大学校歌成る」の記事があり、明本京静作詞・近衛秀麿作曲の校歌の歌詞が掲載された。

同年の『立命館学誌』一二月号には楽譜も掲載され、一月一九日、東京日比谷公会堂のロロンビアのスタジオで、作曲者・近衛秀麿が指揮し、新交響楽団の演奏、作詞をした明本京静、声楽家の徳山璉など東京合唱団により録音された。五〇〇枚が製作され、一枚一円五〇銭で頒布されている。

そもそも立命館の校歌を作ることになったのは一九二八（昭和三）年のことであった。『立命館学誌』第一一五号（昭和三年六月）に立命館大学学友会が、校歌募集の記事を掲載している。

一九二八年という年は、立命館の歴史にとって画期となった年であった。

### 校歌レコード吹込

近衛秀麿氏作曲指揮 明本京静氏作詩

日時 昭和三年六月十九日

場所 立命館学友会ホール（京都）

指揮 近衛秀麿氏

演奏者名（姓氏名簿）

菅野 龍子 立命館音楽部

根井 京 立命館音楽部

熊澤とさ子 立命館音楽部

塚上きく子 立命館音楽部

澤山 璉 立命館音楽部

徳山 璉 立命館音楽部

明本 京静 立命館音楽部

和田 新一 立命館音楽部

岩田 正夫 立命館音楽部

森 立命館音楽部

長崎 隆二 立命館音楽部

志村 實 立命館音楽部

近衛 秀麿 立命館音楽部

菅野 健一郎 立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部

立命館音楽部



立命館大学校歌のレコードレーベル



『立命館学誌』149号記事

新大学令による第一回の卒業生を送り出した年でもあり、昭和天皇の即位の礼「御大典」が京都御所で行われ、また文部省による国民道德の涵養が求められた年であった。

立命館は御大典にあわせて広小路学舎の整備をはかり存心館が竣工、また上賀茂運動場の造成に着手するなど施設の整備を進めた。そして禁衛隊を編成し、愛国教育を進めた年でもあった。そうした状況のもとで募集された校歌は、学園の新たな精神を培うためのものでもあったと思われる。

しかし、九月下旬には発表の予定だった校歌はできず、一九三〇（昭和五）年七月には校歌作成案を中川館長に提出していたのだが、これもまた考慮中とのことと完成を見ず、ようやく一九三一（昭和六）年七月に校歌が完成したのである。

## 第二節 校歌の変遷

最初に完成した歌詞は、冒頭に記したものであったが、戦後幾度かの変遷をしている。

一九四八年一〇月四日、理事会で校歌二番の改廃が提起された。決定されたかどうかの記録は無いが、これ以降実質的には一番のみが校歌として歌われるようになった。

一九五〇年頃の「学生手帳」に掲載された校歌（一番）を見ると、歌詞が一部改変されている。

若き血汐 胸に満ちて 若人誠の 泉を汲みつ

仰げば比叡 千古の緑 富士眼に清しや 加茂の流れの



鏡もとうとし 天の命名 見よ我が母校 立命

立命

〔一九五〇年度学生手帳〕

「あかき血潮」が「若き血汐」に、「天の明命」が「天の命名」に変化している。

学園創立五〇周年記念事業の一つとして製作された校歌のレコードにも「若き血汐」と歌われている。当時の校友にうかがうと確かに「若き血汐」であるという。歌詞改定の記録は無いので、おそらく「ききなし」が通例となってこのように変化したものだろう。

一九七六年一月、学園は改めて歌詞を統一し、メンネルコール、応援団吹奏楽部などの学生音楽団体の協力のもと校歌レコードを作成した。

あかき血潮 胸に満ちて 若人真理の 泉を汲みつ

仰げば比叡 千古のみどり 伏す目に清しや 鴨の流れの

かがみもとうとし 天の明命 見よわが母校 立命 立命

一九九〇年五月二五日、立命館理事会は「校歌の改廃について」改めて審議をし、第二番の廃止を正式に決定した。二番の歌詞は立命館の戦後の教学理念にそぐわないためという理由である。

あわせて一九七六年に統一した歌詞を、改めて正式歌詞として確認し、立命館創始二二〇年・学園創立九〇周年を記念して、外山雄三氏により交響楽の演奏にもふさわしいように編曲され、新しい伴奏曲の校歌が六月七日に完成する。

一九九八年一月二三日 理事会は、学園の発展に伴う各地でのキャンパス開設を鑑みて、「仰げば比叡」「鴨の流れの」といった京都の地域性を表現している校歌のあり方を再検討し、「現在の校歌を学園歌とする。」「立命館大学は現在の校歌を引き続き立命館大学校歌とする。」「各附属校と立命館アジア太平洋大学は各校の判断に委ねる（要約）。」と定め今日に至っている。

## 第七章 立命館の校章と徽章<sup>きしやう</sup>

### 第一節 校章の変遷

立命館の校章は、一九一三（大正二二）年の財団法人『立命館』の設立から始まる。

一九〇〇年に創立した「京都法政学校」は、財団の設立とともに「立命館」の名称を冠し「私立立命館大学」「私立立命館中学」となった。

これを機に校章が改定されて、「立命」の文字が表記されるようになった。

### （一）一九一三年（大正二年）―最初の校章―

「立命館学报」第一号（大正三年二月）に、制帽の徽章改定について記載がある。

「制帽徽章の改定 学校名称改まり大学中学に立命館を冠することになりたれば大学生並に中学生徒の制帽前章を左に示したる通りに改め之を真鍮製にし大学生は角帽中学生徒は独逸形帽の中  
 央に附し一見本学学生若くは生徒たることを瞭然たらしむる事にしたり」

こうして制帽の徽章として定められた最初の校章がこれである。

(二) 一九二二年(大正十一年)

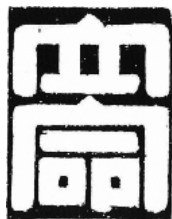
一九一九(大正八)年四月一日、大学令が施行され、それまで大学と称してはいたが法的には専門学校であった私学も、大学令に基づく大学に昇格できるようになった。

一九二二(大正十一年)、立命館も大学昇格を果たし、これを記念して「帽章、襟章」の图案募集が行われ、決定されたものがこれである。

(三) 一九四二年頃(昭和一六年頃)

現在の校章になったのは、一九四一年頃(昭和一六年頃)でこれに先立ち一九三五年頃(昭和一〇年頃)に色指定がなされている。色は立命の文字を金、大学の文字は銀であった。

時期がはっきりしないのは、敗戦後に禁衛立命の解体を急ぐあまり各種書類を焼却したため記録がなくなつたことによる。(『立命館学園広報』(一九七一年六月二〇日))



## 第二節 立命館のいろいろな徽章

校章以外にも、立命館の歴史の中で様々な「徽章」が生まれている。新校章を目指して募集したものの、シンボルとしての徽章、コミュニケーションマークとしての徽章。

その誕生の変遷を追ってみる。

(一)「立マーク」(一九六〇年～一九九四年)(校章にはなれなかった統一マーク)

一九六〇年、学園は創立六十周年記念事業の一環として、校章の改定を意図して新しいデザインの校章と学生歌を募集した<sup>(二六)</sup>。

『立命館学園新聞』(一九六〇年七月一日号)には、「庶務課は六十周年記念行事の一環として本学学生歌の歌詞と校章を本学学生・教職員・校友を対象に募集している。」「校章のメ切は八月末日、発表九月中旬、賞金は一席五万円、佳作二席各一万円、大きさ、色は自由、ただし原寸を記入のこと。」との記事がある。

二五六件の応募があったが、「創立六十周年記念行事の一環として募集した校章図案に関して、専門家を加えた委員会で銓衡したが、応募作品の中には優秀なものがない為、佳作三点を決め、今回は校章として選定することを送りバッチとして利用させたい旨説明があつて、一同諒承。」(一九六〇年一〇月二八日 理事会議事録)として決し、校章の変更はなされず、応募作品は「バッジ」(徽章)としてリリースされることとなったのである。



『立命館学園新聞』（一九六〇年一月一日）には、「統一バッチ決まる 青木君（法三）の図案採用」の見出しで、「庶務課は六十周年の一環として校章を募集していたが、八月末にメ切り、このほど大学諸機関の審議も終わって三一日発表された。約二四〇点の応募があったが、入選作品がなく佳作三点が選出された。佳作三点とも青木喬君（法三）の作品で、バッチは立命館の立の字をもじり二つの弧が組み合わさっていると報じている。

その後このバッチは、年明けの一九六一年一月九日から販売が始まった。『立命館学園新聞』（一九六一年一月一三日）には、「売れゆきは上々 九日から新バッチ発売」の見出しがあり「厚生課は六十周年記念行事の一環として決定した統一バッチ（青木喬一法三の図案）の発売を九日から始めた。バッチの単価は一五円で色は金、銀、銅、赤銅の四種類がある。これで従来のバッチは一掃され全部統一される。」とあり、図案の意図について「立の字をもじったものであるが、弧は完成していない円、すなわち人間として未完成である学生を示し、二つの交り合っている弧は互いに協力しあうことを象徴している。」と説明している（一七〇）。

このマークはそのデザインの類似性から通称「亀の子マーク」として学生・教職員に愛され、立命館中学校・高等学校の校舎に掲げられたり、校友会の卒業記念バッチとして配布されたり、ネクタイやライターなどの記念品のモチーフとして活用された（二八）。

#### (11) Risマーク（一九九四年～二〇〇七年）（学園アイデンティティのシンボル）

一九六〇～一九八〇年代にかけて愛用された「立マーク」に代わり、新たなマークが生まれた。

一九九四年三月九日常任理事会で決定したこのマークは、「本学のめざすべき姿を視覚化し、より強く、より美しく『立命館』を印象づけるコミュニケーションシンボル」として位置づけられ、「二一世紀に日本をリードするベストユニバーシティ」としての存在を確立する」ことを目的とする総合広報戦略の一環とされた。いわば学園アイデンティティの象徴として創造されたマークであった<sup>二九</sup>。

また、常任理事会では、このマークの決定にあわせて、イメージコンセプトも決定している。

「知の活力と理性で未来をひらく大学」「『未来を信じ未来に生きる。そこに青年の生命がある』知性と理性が生み出す若々しい生命 そのいきいきした力で未来を志向する大学」

というものであった。

以後、学園の発行物等は、すべてこのマークに統一され、これまでの「立マーク」は使用しないこととされた<sup>三〇</sup>。

### (三) Rマーク(二〇〇七年～)(学園のブランドコミュニケーションマーク)

一九九四年に設定されたRマークから一〇数年を経て、学園は大きく発展した。これに伴い「立命館ブ

ランド」のさらなる強化が必要とされるようになり、二〇〇七年、現在使用されている「R」マークが制定される。

「コミュニケーションマークの設定について」（二〇〇七年九月二二日常任理事会）では、「立命館学園のブランドコミュニケーション活動の強化を目的」として、「約一〇万人の受験生やその父母、三〇万人を越える卒業生や教職員等、立命館学園のステークホルダーの関係強化を図る」「立命館学園のすべてのステークホルダーの『心をひとつにする』」ことを目指して設定することが述べられている。

デザインはクリエイティブディレクター／アートディレクターの秋山具義氏、五対八の黄金比を元に、立命館憲章で掲げられた「『確かな学力の上に豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人材』を生み出す『立命館学園』の姿を頭文字『R』一文字で表現。ゴシックで表現することによって、力強さ、信頼感、本物感、安定感を強調」するとしている。

あわせて「+R 未来を生み出す人になる。」をタグラインとして設定し、以降、「コミュニケーションマーク」として様々な広報に使用されるようになった。

二〇〇七年一〇月には、このコミュニケーションマークの使用基準が定められ、Risマークは二〇〇八年から徐々に入れ替えていくこととされた<sup>(三)</sup>。

### 第三節 立命館アジア太平洋大学

二〇〇〇年四月に大分県別府市に開学した立命館アジア太平洋大学は、従来の立命館の校章をアレンジす



るのではなく、大学のイメージにふさわしい新しいシンボルマークを設定した。

このシンボルマークは、一九九九年四月に完成し、キャンパス正面のツインタワーに掲げられている。

『立命館アジア太平洋大学 開学の歩み』（二〇〇〇年五月二〇日）には「APUのシンボルマークが完成し、四月一日より使用を開始しました。デザインは、富士通・ファミリーマートなどのシンボルマークを手がけたデザイナーの原田進氏によるものです。立命館アジア太平洋大学のシンボルマークは、略称を『APU』と定め、これをベースに、二一世紀のアジア太平洋を象徴する躍動感あるイメージ、アジア太平洋からの発信を連想される波のモチーフをデザインし、立命館の歴史と伝統を受け継ぎファミリー性をアピールする同じエンジ系カラーを使用、太ゴチックのフォントで世界に広がるダイナミックさを表現しています」と、主旨を記載している。

このシンボルマークは、一九九九年二月一日常任理事会においてAPU校旗にも使用することが決定している。

#### 第四節 附属校の校章

学園附属校は、それぞれの前史を引き継ぎながら校章を定めてきた。





(一) 立命館中学校・高等学校（一九〇五年）（御所・清和院御門に由来する校名）

現在の「立命館中学校・高等学校」は、一九〇五（明治三八）年「私立清和普通学校」として誕生した。その後「私立清和中学校」（一九〇六年）、「私立立命館中学」（一九一三年）、「立命館中学」（一九一九年）と変遷し、一九二八（昭和三）年に「立命館中学校」という校名になった。清和という名称は、最初の学舎が御所・清和院御門前の広小路キャンパスに誕生したことから名づけられている。

校章は立命館大学と同様の経過を辿り、しばらくは「立命」の文字だけを使っていたが、その後、現在使われている「立命」の中に「中」を入れる校章となった。

「立命館高等学校」は一九四八年に誕生し、立命館中学校の校章に準じて制定された。

(二) 立命館宇治中学校・高等学校（一九九五年）（宇治茶の葉をイメージ）

現在の「立命館宇治中学校・高等学校」は、学校法人宇治学園が設置した「宇治高等学校」を前身として、法人合併の後一九九五年四月に「立命館宇治高等学校」として開校した<sup>(111)</sup>。

校章は「宇治高等学校の校章にも用いられていた『宇治茶の葉』のデザインの上に『立命』および高等学校を意味する『高』を組み合わせたものとする。配色は、『宇治茶の葉』を銀色、『立命』を金色、『高』を銀色とする。」（一九九四年七月二二日理事会）と



して定められた。

二〇〇三年四月には「立命館宇治中学校」が開設され、校章は高等学校に準じるとして制定されて現在に至っている。

(三) 立命館慶祥中学校・高等学校（一九九五年）（雪と星をモチーフに）

現在の「立命館慶祥中学校・高等学校」は学校法人慶祥学園が設置した「札幌経済高等学校」を前身とし、法人合併の後一九九五年二月に「立命館大学慶祥高等学校」として誕生した。校章は「図案の背景は雪と星をデザイン化し、未来に向けて光輝く高校のイメージを強調しており、同時に『線の集合』は人の集まりを外周の六角形が輪（和）をイメージしている（札幌市も市章のモチーフとして雪の結晶をデザインしている）。

デザイン的には、太い線のシンプルな構成により、現代的・先進的な印象を与えるよう配慮してある。中心部には立命館学園共通の『立命』の文字、高校を表す『高』の文字を重ね合わせている。（一九九五年二月二二日理事会）として制定された。

「立命館大学慶祥高等学校」は二〇〇〇年四月に中学校を開校、同時に学校名を「立命館慶祥中学校・高等学校」としている。中学校の校章は高校に準じて定められた。



(四) 立命館守山中学校・高等学校 (二〇〇六年) (びわ湖に広がる波紋)

現在の「立命館守山中学校・高等学校」は、滋賀県守山市立の高等学校を前身とし、二〇〇六年四月に「立命館守山高等学校」として開校した。

校章は「滋賀県に設置される附属高校であることと、世界水準の人間形成をめざす立命館守山高等学校の拡がり」を、びわ湖の水面で波紋が広がっていく様子で表している。文字は接続先である立命館大学ならびに立命館アジア太平洋大学の『立命』の文字デザインを基本とし、高等学校を意味する『高』を組み合わせたものとする。配色は、円の部分が白地に銀色、『立命』が金色、『高』をえんじ色とする。」(二〇〇五年七月一五日理事会)として制定している。二〇〇七年四月には中学校も開設され、校章は高校に準じて定められた。

(五) 立命館小学校 (二〇〇六年) (社会の中で学び友情の輪を)

「立命館小学校」は二〇〇六年四月、かつて立命館中学校・高等学校があった北大路のキャンパスに開校した。校章は、「①立命館小学校の児童は立命館中学校・高等学校へ進学することが設置委員会で確認されている。接続先である立命館中学校・高等学校のデザインを基本とした。②小学校と初めての社会(輪)の中で学ぶ・友情の輪をイメージしている」(二〇〇五年六月二二日常任理事会)として制定している。



## 第八章 立命館の校旗・スクールカラー

立命館の校旗の色は「紫紺」。スクールカラーは「えんじ色」である。紫紺の校旗は、入学式典、卒業証書・修了証書授与式典で演台に掲げられている房付きの旗。えんじ色の旗は、式典時に校門に掲げられる「門旗」に使用されている。

### (一) 紫紺の校旗

一九一三(大正二)年二月二日、立命館は「財団法人立命館」を設立し、校旗も改製した。『立命館学報』第一号(一九一四年二月)には校旗の改製について掲載されている。(改製であるからこれ以前にも校旗はあったはずだが、現在のところ不明)

「校旗改製 学校名改称の結果自然校旗の改製を要すること、なり地質を塩地織にし之を紫紺色に染め中に白く立命館大学又は立命館中学と抜出し其の旗竿を漆塗にし竿頭に鎗身を附することにしたり」

また、校章の色指定については、『立命館学園広報』



立命館大学校旗  
(現在使用されている校旗)



立命館中学校校旗  
(現在使用されている校旗)

(一九七一年六月二〇日)に「昭和一〇年頃には、立命の文字を金モール、その中央に大学の場合は大を、専門学部には専、というように銀モールであらわした。現在の校章になったのは昭和一六年頃である。これらの年月日は、敗戦後、禁衛立命の解体を急いで書類の焼却を行ったため、さだかではない。」とある。

## (二) えんじ色の門旗

式典時に各校門に掲げられる旗は、「校旗」ではなく「門旗」である。この「門旗」はえんじ色で調製されている。この印象が強いため、立命館の校旗はえんじ色であるとのイメージが生まれた。

## (三) えんじ色はスクールカラー

「門旗」に使われたえんじ色は、立命館のスクールカラーである。立命館を象徴し、「門旗」を始めいろいろな広報物やクラブの旗などに使用されているが、公式に決定されたのは一九九四年三月九日の常任理事会で、学園のコミュニケーションマークを「Ris」と定めるにあたって「明るいえんじ」をスクールカラーと決定したのが最初である。

「えんじ」ははるか昔より立命館のスクールカラーとして慣習化しており、「立命館大学応援歌」(一九四九年に製作されたと伝わる)は「えんじの旗をなびかせて」と歌われる。

始まりの記録は不明だが、立命館大学陸上競技部の『創部六〇周年記念誌』(一九八七年)によると、一九三二



立命館高等学校「門旗」

(昭和七)年の日本学生陸上に出場したのちえんじ色のユニフォームを作ったことが書かれており、非公式ではあるが、えんじ色は既に昭和の初期から愛用されたと考えられる。

なおAPUは、一九九九年一月一日の常任理事会において、APUのシンボルマークを活用してイメージを統一させる。立命館学園内の一大学として、校旗のベース色はえんじ（APUカラー）を使用し学園全体のアイデンティティの共有化を図るとして、校旗の色を「えんじ」に定めている。

また、立命館守山中学校・高等学校も 二〇〇五年七月一五日の理事会において校旗はえんじ色の地に校章を用いたものとする<sup>(三三)</sup>と定められた。

## 第九章 立命館憲章

本稿の最後に、二〇〇六年に制定された「立命館憲章」全文をもって締めくくるとしたい。

「立命館憲章」は二〇〇五年一月一六日に初めて学園の常任理事会で提起され、二〇〇六年一月一八日に「起草委員会」が設置された後、半年間かけて言葉・表現・文節の一つにいたるまで、全ての学生・教職員の議論に付された。その後、意見集約・再提案をおこなって二〇〇六年七月二一日制定されている。

文面には、建学の精神・教学理念はじめ学園を支えてきた様々な理念・原則・教訓が織り込まれ、二大五附属校となった立命館学園のアイデンティティとして確立され、立命館の社会的使命を明示している。

## 立命館憲章

立命館は、西園寺公望を学祖とし、一九〇〇年、中川小十郎によって京都法政学校として創設された。「立命」の名は、『孟子』の「尽心章句」に由来し、立命館は「学問を通じて、自らの人生を切り拓く修養の場」を意味する。

立命館は、建学の精神を「自由と清新」とし、第二次世界大戦後、戦争の痛苦の体験を踏まえて、教理念を「平和と民主主義」とした。

立命館は、時代と社会に真摯に向き合い、自主性を貫き、幾多の困難を乗り越えながら、広く内外の協力と支援を得て私立総合学園への道を歩んできた。

立命館は、アジア太平洋地域に位置する日本の学園として、歴史を誠実に見つめ、国際相互理解を通じた多文化共生の学園を確立する。

立命館は、教育・研究および文化・スポーツ活動を通じて信頼と連帯を育み、地域に根ざし、国際社会に開かれた学園づくりを進める。

立命館は、学園運営にあたって、私立の学園であることの特性を活かし、自主、民主、公正、公開、非暴力の原則を貫き、教職員と学生の参加、校友と父母の協力のもとに、社会連携を強め、学園の発展に努める。

立命館は、人類の未来を切り拓くために、学問研究の自由に基づき普遍的な価値の創造と人類的諸課題の解明に邁進する。その教育にあたっては、建学の精神と教学理念に基づき、「未来を信じ、未来に生きる」の精神をもって、確かな学力の上に、豊かな個性を花開かせ、正義と倫理をもった地球市民として活躍できる人間の育成に努める。

立命館は、この憲章の本旨を踏まえ、教育・研究機関として世界と日本の平和的・民主的・持続的発展に貢献する。

二〇〇六年七月二一日学校法人 立命館

## 注

- (一) 岩井忠熊 『西園寺公望―最後の元老―』岩波新書二〇〇三 参照
- (二) 『立命館創立者生誕一五〇年記念 中川小十郎研究論文・図録集』立命館史資料センター 二〇一七 参照
- (三) 前掲
- (四) 前掲
- (五) 『立命館百年史 通史一』三二頁
- (六) 前掲
- (七) 前掲
- (八) 天野総長の言葉は、以下を参照。吉田幸彦（一九九五）『自由にして清新』考（未定稿）立命館百年史紀要 第三号
- (九) 西園寺公望は、一九四〇年一月に没した後、翌月の一二月に立命館の学祖と定められている。
- (一〇) この間「平和と民主主義」があえて議論の俎上に載るのは、「新学部設置準備」（一九六二年に開設された経営学



部のこと)に関わって立命館教学の有り様を確認する必要からであった。「新学部増設について」(一九六一年四月二二日企画委員会)では、経営学部を設置する際の教学と経営のあり方について「大学の運営は教学が優先し、しかもそれが経営と一体化しなければならぬ。教学の根本は平和と民主主義をめざし、それぞれの分野における学問と技術を身につけた人材を養成することにある(以下略)」とある。

一九五〇年代の立命館は、戦後増え続ける大学進学者に対して、貧弱な教育施設設備で大学運営を行っており、教育施設設備の充実が喫緊の課題である一方、物価が上昇し続ける状況下にあつて学園財政は逼迫していた。学園の財政と教育の充実を両立するためには、学園規模を拡大(新キャンパスの展開)する必要がある、そのために「商学部」を増設するとの議論があつたのである。一九五七年「商学部」設置は凍結となつたが、その後一九六〇年代初めに「経済学を基礎とする経営学」を学問の中心とする「経営学部」の設置が改めて検討された。「経営学部」設置の議論は新しい学問分野を切り拓くだけでなく、五〇年代の課題であつた教職員の待遇改善、学費額の抑制、学園経営上の必要性からも重要だつたのである。その議論の中で、教学を充実させることが経営の基盤であるという考え方の議論が行われ、教学の根本概念とは何かとして、「平和と民主主義」が述べられた。とはいえ経営学部設置をめぐる各文書中には「平和と民主主義」は統一して使われておらず、四月二二日企画委員会に続く「私学教学理念の在り方からみた新学部設置の意義」(一九六一年五月一三日)では「民主と自由の原則」「国民的教育、民主的研究の精神」という言葉が使われ、「新学部(経営学部)設置問題についてのまとめ」(一九六一年七月四日)では「自由と民主主義」という言葉が使われており、いずれも「平和と民主主義」は出てこない。

この時期「民主」「自由」「平和」はキーワードであつて組み合わせに特別な意味を持たせるまでにはいたつていなかったたのであろう。

(二一) 一般的には「学園紛争」と称されるが、立命館学園ではこの紛争が立命館大学のみが発生し、附属校である立命館中学校・高等学校では発生しなかつたことから「大学紛争」と呼称している。

なお、「大学紛争」は一九六五年一月下旬の慶応義塾での学費値上げ反対闘争を端緒とし、翌年に首都圏の大規

模私立大学（早稲田・明治・中央など）で、一九六七年に東京医科歯科大学や東京教育大学などの国立大学で、一九六八年に日本大学や東京大学で紛争が起こっている。立命館をふくめて関西や全国に紛争が広がっていくのは、一九六八年後半から一九六九年であった。

(二二)「学園新聞社事件」は、立命館大学における大学紛争の直接のきっかけとなった事件。一九六八年二月一二日、立命館大学新聞社の発行している『立命館学園新聞』が学友会の活動を正確に報道していないのでこれを是正するとの理由で学友会メンバーが新聞社入社申し込みをしたところ、新聞社側がこれを認めず糾糾し、それぞれを支援する学生集団が対立して行動を始めた。「全共闘」が前面にでてくるきっかけともなった。詳細は『立命館百年史 通史二』参照。

(二三)戦後立命館には様々な危機があり、全学の真摯で民主的な討議を経て乗り越えてきた歴史があった。その都度全学の合意による立命館らしい制度を創設して乗り越えてきた。一九四〇年代の「総長公選制度」「総長選挙へ学生参加」「学内優先の原則」「全学協議会制度」、そして一九五〇年代半ば「私学危機」と「緑の学園構想」を経て確立された「長期計画委員会」制度、一九六〇年代初頭の学園財政を保障するためには教学改革こそが大切であるという、教学と財政の一致の考え方などがそうである。

こうして蓄積した立命館の民主主義的討議の仕方や諸制度を否定した上で一方的な要求を突きつけ、要求が受入れられないと施設の占拠・破壊によって大学の教育行為そのものを妨害する。これらの行為は他の学生の学ぶ権利、教員の教える権利を妨害し、大学そのものの機能を麻痺させるに至り、単にこの年度の個別問題ではなく、戦後の立命館学園が築き上げてきた存在理由を全面否定する重大な危機であるとの認識であった。

(二四)「大学改革のための討議資料」は次の四冊。

- ・「大学改革のための討議資料 その一〔大学、立命館民主体制改革の方向〕」（一九六九年四月三〇日 立命館大学（学内）理事会）
- ・「大学改革のための討議資料 その二〔教学の歴史的総括、教学各論〕」（一九六九年八月六日立命館大学（学内）

## 理事會)

・「大学改革のための討議資料 その三（未定稿）〔研究・教育と組織運営、意思決定と執行組織、その他〕」（一九六九年一〇月一八日立命館大学（学内）理事會）

・「大学改革のための討議資料 その四（未定稿）〔学生処分制度〕」（一九七〇年三月一三日 立命館大学（学内）理事會）

(二五) 当時の「学園通信」は年二回（四月、一〇月）発行。四月は新入生の大学生活、一〇月は大学の教育が中心記事であった。いずれも学生の親に向けた広報誌であったため、記載内容は大学の現状を知らせるものであり、書き方も父母向けだった。「学園通信」は立命館大学衣笠図書館で閲覧できる。

(二六) 末川総長は一九六九年四月一日、五期二〇年の任期を終えて退任し、武藤守一経済学部長が新たに総長となる予定であった。しかし「大学紛争」の混乱にあつて総長選挙規程の改訂に関わる全学討議が出来ず、総長選挙も不可能であったため、この時期「立命館大学総長事務取扱」という臨時の役職についていた。

その後新総長選挙規程は、一九六九年一二月に成立し、翌一九七〇年二月に新規程による総長選挙を実施して武藤守一総長が誕生している。

(二七) 立命館大学は、二つのキャンパス（広小路、衣笠）があつたが、広小路から衣笠へ順次学部移転を進め、一九八一年の法学部移転をもってすべての学部が衣笠キャンパスに移転した。これが「衣笠一拠点」事業で、一九八一年五月一六日に「学園創立八十周年・大学衣笠移転完成記念式典」が開催されている。

「未来を信じ 未来に生きる」の石碑はすでに一九八一年四月に建立されていたが、この日に合わせて天野総長揮毫による建立趣意銘板が設置され、五月一六日九時三〇分から改めて石碑の披露が行われている。（『立命館学園広報』第一二〇号 一九八一年五月二〇日、『同』第二二二号 一九八一年六月二〇日）

建立趣意銘板の日付が五月一六日ではなく五月一九日となっているのは、五月一九日が立命館大学の創立記念日であり、同日をもって「学園創立八十周年」となるため。

また、石碑は一九八一年に建立された後、一九八九年に改装され現在に至っている。故末川博先生の十三回忌にあたる一九八九年二月一日に石碑の文字部分をプロンドキャストに改装。合わせて石碑裏面の天野総長の由来を銅版に刻んで石碑前に建てた。（『立命館学園広報』第二〇六号 一九八九年二月二〇日）

（一八）「わだつみ像」言葉の由来

「わだつみ」もしくは「わたつみ」は漢字では「海神」、万葉集や古今和歌集にも出てくる言葉だが、字のとおり、海を司る神のことである。この言葉が「きけわだつみのこえ」として戦没学生の手記の表題になったのは、この手記に寄せられた京都の藤谷多喜雄氏の詩「なげけるか、いかれるか、はた もだせるか、きけはてしなきわだつみのこえ」に由来している。南や北に散っていった学徒の心を「わだつみ」であらわしている。以来、戦没学生をあらわす言葉として「わだつみ」が使われだし、像も「わだつみ像」と名づけられた。（像と共に未来を守れ―わだつみ像再建立記念―）わだつみ像建立立命館大学実行委員会一九七六年五月二〇日）

（一九）一二月八日は、「太平洋戦争」の開戦日。

一九三一年九月一日に勃発した「柳条湖事件」に端を発する「満州事変」、一九三七年七月七日「盧溝橋事件」から始まる「日中戦争」を経て、一九四一年一二月八日、大日本帝国はアメリカ太平洋艦隊基地であるハワイ・オアフ島の真珠湾を攻撃、またマレー半島などの東南アジア諸国への侵攻作戦を開始し、同日付でアメリカ・イギリスに対して宣戦布告の詔勅が発せられている。（『満州事変』『日中戦争』『太平洋戦争』を総称して現在は「アジア・太平洋戦争」と称されている）

戦後、一二月八日は開戦日、八月一日は終戦日として反戦平和を誓う記念日となり、様々な取り組みが行われている。「わだつみ像」の完成は八月二五日、立命館大学の「不戦のつどい」も必ず毎年一二月八日に開催されている。台石に刻まれた末川の文の日付が一二月八日であることもこれに由来する。

（二〇）現在の「不戦のつどい」は、衣笠キャンパスは、国際平和ミュージアムの「わだつみ像」前、BKCは中央広場の「嵐の前の母子像」前、OICは「わだつみ像エスキース」前で行われている。

(二二)「わだつみ像建立立命館大学実行委員会」が発行した「わだつみ像建立を訴える」(一九七五年二月一日)では、再建立の意義を次のように記載している。

「わだつみ像は一九七〇年二月八日、不戦のつどいの日に、像再建を願う全国の多くの人々の激励や多額の資金に支えられ、全立命人の努力と制作者本郷新氏の協力によって、再び完全な姿で立命館大学に迎えられ、除幕式が行われた。それから五年間、我々全立命人は、五月二〇日と二月八日が来るたびに、破壊された像とともに新像をおしたてて、反戦・平和の誓いを新たにし、決意を固めてきた。しかし、学園内外の様々な事情により、我々は、新像の建立を今日まで実現できないままにきている。我々全立命人には、平和と民主主義を願い、像再建に協力してくれた全国の多くの人々の期待にこたえて、一日も早く、像を建立する責任がある。(中略)我々は、その行動の一つとして、ここに、太平洋戦争勃発三五周年にあたる来年五月二〇日を目指して、わだつみ像を立命館大学内に建立する運動を再開することを呼びかける。」

(二一)立命館学園の歴代総長はこちらを参照 [http://www.ritsumeijp/profile/a05\\_04\\_j.html](http://www.ritsumeijp/profile/a05_04_j.html)  
一九四九年に制定された総長公選制度はその後、二〇〇五年に「総長選任制度」(二〇〇五年七月八日規程第六五二号)に改定。その後、総長選任制度検証・検討委員会の答申(二〇一〇年一月一三日)を受けて二〇一〇年四月二三日に総長選任制度が廃止。改めて「学校法人立命館総長選挙規程」(二〇一〇年四月二三日)が制定されて今日に至っている。

(二三)末川辞任には真因があるとされている。

『立命館大学新聞』(号外 一九四九年一月一五日付)は、「末川総長辞任の真因を衝く」の見出しの下に、「総長辞任の裏面には大体次の如き事由が存在するものと見られている」と末川辞任の真相に迫った。とし、最大の辞任理由は私学の経営問題を解決するだけの才覚が自分には無いとするものであるが、別に隠れた理由があるとすると、第一は、学園拡充計画問題において総合グラウンド建設を主張する一部の体育教員とそれに同調する理事・評議員、運動部学生やOBとの対立である。

末川は本計画よりも教授陣の充実や教室などの設備を優先すべきであると主張したが容れられなかった。財政計画は杜撰で、結局寄付だけでまかなえず学園一般予算から充当することとなり学費負担という形になってしまった。加えて建設工事をめぐる疑惑が浮上り社会的問題になってしまった。これらが総長の責任という形で末川の身に降りかかった。

第二は、学園経営における責任と権限の問題で、学園経営の責任者であった専務理事の死去によりほとんど非専任の理事ばかりの中で、事実上総長に経営責任まがかかっていた。にも関わらず総長は寄付行為上一理事にすぎず、経営判断の権限が保障されていなかった。

第三は、久保体育科教授との対立問題で、戦後の教員適格審査委員会により不適格とされた同教授がこれを不服として学園と争っていたが、グラウンド建設計画推進の中心教授であったため同計画推進派の役員・OBが介入し、末川を非難していた。末川はこうした事態に嫌気が差していた。

これらのことが末川辞任の背景にあるとし、以降「学園民主化」「学園ボス追放」「末川総長留任」の運動が全学で巻き起こることとなる。(『立命館百年史 通史二』一八三―一八六頁)

(二四) 斯くも迅速なる一連の経過には、国家主義的旧体制派が今だ根付く学園理事会に対して、末川を中心とする教員集団の学園民主化闘争の背景があるとの研究がある。

つまり、総合グラウンド計画を象徴とする守旧派の専横・利益誘導との攻防において、末川を中心とする民主化推進派の教員集団が、学園の寄付行為の民主化を通じて守旧派を放逐する準備を進めていたとする。寄付行為の改正は、総長公選制とともに理事会の「学内優先」原則(教育・研究を重要視するため、理事のメンバーの過半を学内者、特に教授会自治の要である学部長とするもの)が組み込まれていた。

(『立命館百年史紀要』一三三―一三九頁、『一九四八年、末川の総長辞任と寄付行為の改正―学園民主化の一断面』吉田幸彦) (二五) 「拡充委員会」への学生の関与の仕方をめぐって、『立命館百年史 通史二』では次のように学生参加のあるべき姿を整理している。

「学生への教学責任は、基本的には学園が負うものであり、最終的にはその経営体としての法人に帰する。学生参加とはその法人の経営責任を認めつつ、政策決定過程において学園の構成員としての民主主義的責務を果たすことであり、学生が法人になり代わってその機能の一部ないし全部の執行に関与することではない。学生もしくは学生団体は、そうした関与から派生する責任を全うすることができないからである。その点で、学友会の「拡充後援会」への参加と、そのなかでの個々人の役割には学生参加の限界を超えるものがあつた。真剣で懸命の取組みであつただけに、この学生参加は苦渋の経験となり、学生は学園の呼びかけにもかかわらず後の拡充委員会への参加を拒否し、新たな全学的な協議機関を創出した。この新たな学生参加の形態としての「全学協議会」は、この年末に起こる末川総長の辞任問題と、その復帰を目指す全学挙げた学園民主化闘争を経て、学園に定着していくこととなった。」(『立命館百年史 通史』二 一八九頁)

(二六) この時に同時募集した「学生歌」は 応募数数百編 九月一日に入選作を発表している。「立命館学園新聞」(一九六〇年一〇月二二日)には「学生歌できる かがやける明日をのぞみて」と題して「審査の結果、岩崎絃久君(理工学部一回生)の「かがやける明日をのぞみて」が入選した。作曲は長谷川良夫氏(東京芸術大学助教授)に依頼、発表は一一月六日の六十周年記念式典で行われる」とある。

(二七) 徽章を意味する badge は「バッジ」または「バッヂ」が発音に近いが、学園新聞記事では「バッチ」となっている。引用であるため原文ママとした。

(二八) 「立マーク」については『立命館百年史 通史』二 六〇八―六〇九頁も参照。

(二九) 「Ris マーク」については、『立命館百年史 通史』三 五八五―五八七頁も参照。

(三〇) 「新しいコミュニケーションシンボル Ris の展開について」(一九九四年三月九日常任理事会)には、Ris マークを立命館を冠するあらゆるものに使用することとされ、展開の例として①広報・広告物(大学案内、入試要項、パンフ、新聞広告、ポスター、プレスリリース用紙)②校章類(名札、学生証、職員証)③事務帳票類・文書類(名刺、封筒、用箋、請求書、ゴム印)④サイン・什器類(屋内外表示、ゴミ箱)⑤車両類⑥ユニフォーム類が例示さ

れています。学生諸団体、校友会、父母教育後援会のユニフォームや発行物にも統一使用をしてもらうよう学園から要請することとなった。

Ris のロゴ、組み合わせる和文・英文学校名も全て規格化されて、使用するカラーもスクールカラーとして「特色」DIC PART II 2488（1版）「四色分解 C：二〇 M：一〇〇 Y：五〇 B L：一〇 相当色」と定められた。

また、これまでの校章、立マーク並びに筆文字の「立命館」の扱いについて明記されている。「校章は一九〇五年に制定されて以来、本学を象徴するものとして受け継がれてきた。また立マークは、学園創立六十周年にあたって公募されたもので、以来親しまれ使用されてきた。一方、学祖・西園寺公望による筆文字「立命館」は、本学にとっては歴史的・文化的な財産として、長い間立命人に親しまれてきたものである。従って、これらは今後も立命館の財産として、当然受け継がれていくものである。しかし、その使用にあたっては特別に限定されて使う場合を除いては、今後広報物等にデザイン的に使用することはしない。

また、立マークについては、今回ロゴマークが決定したことによってその歴史的役割を終えたものと判断し、今後新たな使用はしない。」

なお、このマークは民間のデザイン専門会社三社からの提案を広報委員会で選定し、採用された会社は「株G Kグラフィックス」（東京都新宿区）であった。「立命館学園の「校章」「襟章」「その他の徽章」等について」『立命館百年史紀要』第一八号（二〇一〇年三月）

(三)「コミュニケーションマーク「R/RITSUMEIKAN」の使用基準ならびに新マーク制定に伴う今後の使用方針について」(二〇〇七年一〇月二四日 常任理事会)には、「使用基準」として「マーク(R)とロゴタイプ(RITSUMEIKAN)は、他大学・団体等との混同を生じることがあるので切り離さずに必ず一体のものとして使用することとする。基本デザインとして縦組みと横組みの二通りを開発した。基本的には「R」と「RITSUMEIKAN」が一体となった縦組みデザインを使用することとする。」と定められている。



また「カラー」はこれまでのRisマークと統一して 特色 DIC PART 2 2488 (四版)、四色分解参考色として C:三〇 M:一〇〇 Y:一〇〇 K:一〇、C:二〇 M:一〇〇 Y:七〇 K:三〇、と指定。「バックが濃いベタ色の場合はシンボルマーク、ロゴタイプ共に白抜きとして使用できる。スミ一色で表現する場合はスミ一〇〇%で表現する。」としている。

(三二) 立命館宇治高等学校は一九九五年四月をもって開校とされるが、一九九四年八月には宇治三室戸学舎の国道沿い正門に「立命館大学附属 立命館宇治高等学校」の木製プレートが掲出されている。これは一九九四年三月一日の合併調印式後、四月二七日から開始された「学校法人立命館・学校法人宇治学園教学に関する協議会」での教学内容精査結果と、六月から開始された生徒募集の広報活動にともなって地域の強い関心を得たこと。八月には法人合併が認可されたことから掲出された。また九月には校名を「立命館宇治高等学校」に変更しているため、これをもって設置とする場合もある。

(三三) 校章・徽章・スクールカラー・校歌等は次の文献も参照。

『立命館学園広報』第二〇号 (一九七二年四月二〇日) の記事「スクール・カラーと校歌のこと」

『立命館百年史紀要』第一八号 (二〇一〇年三月) の「立命館学園の「校章」「襟章」「その他の徽章」等について」

#### 立命館 史資料センターホームページ 関連記事

「今日は何の日」九月 私塾立命館の創設 <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=18>

「今日は何の日」五月 立命館の創立記念日は五月一九日。 <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=8>

〈懐かしの立命館〉「自由と清新」「平和と民主主義」の始まり―建学の精神、教学理念は何時できたのか?―

<http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=98>

「今日は何の日」一二月 わたごみ像 <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=26>

- 〈学園史資料から〉わだつみ像再建立 <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=59>
- 〈学園史資料から〉わだつみ像 バッチ・キーホルダー・盾 一九七五～一九七六年 <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=37>
- 〈懐かしの立命館〉「未来を信じ 未来に生きる」の意味 <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=72>
- 〈懐かしの立命館〉立命館大学の長い一日 その日「わだつみ像」は破壊された <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=125>
- 〈懐かしの立命館〉「総長公選制度」と「全学協議会制度」の始まり <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=66>
- 「今日は何の日」七月 校歌・学園歌の始まり <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=14>
- 〈学園史資料から〉立命館校歌・学園歌の歴史 <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=65>
- 〈学園史資料から〉学園歌集・音源 <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/audio-archive/>
- 〈学園史資料から〉「立命館大学学生歌」と「寮歌」 <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=52>
- 〈懐かしの立命館〉校章と徽章の変遷 <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=107>
- 〈懐かしの立命館〉校旗の色は「紫紺」えんじ色はスクールカラー <http://www.ritsumei.ac.jp/archives/column/article.html/?id=104>